

元日の朝。新聞2紙を読み、年賀状に目を通す。昼になると頃、お屠蘇<sup>とよそ</sup>を飲み雑煮を食べ、サツカーレの天皇杯を見てから墓と神社に参る。いたって穏やかな一日を過ごすのが、我が家の習慣となつて長い。

た。家の者は、2日に年賀  
40歳頃まではなかなかだつ  
た。僕が20代半ばから

に訪れる友人知人をもてなすため、正月前から大量のおせちや鍋物などの準備に忙殺される。業受け入れ

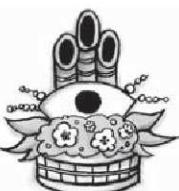
おれは僕も受け入れ  
態勢を整えるために右往左往。  
最初はわずかな友人た  
ちと始めたのだが、どんど  
ん膨らみ、朝から晩まで老  
若男女50人になった年も。  
雪道をバイクのタイヤに荒  
縄を巻き付けてやつてくる  
猛者までいた。

絵に囲まれた仕事場で車座になつて呑み、食い、歌

り込まれることもあつた。  
勢いそのまま外に出、樂器を手に暗がりをそろそろ歩きながら「オネリだ！」なんて街に繰り出す。飲み屋に押し入ろうとする多勢の輩に、マスターはたまらずビールを一杯ずつ振る舞つての追い返し作戦。酔いどればかり、いろんな事件もあつたが、寛容も不寛容

正月

静謐と喧騒



は、ある年、忽然と湧くよ  
うに出現した若者たちが街  
を占拠するのを見て、終わ  
りにした。ファッショーンか  
ら振る舞いまで、真似まねが真  
似を呼んだような若者グル  
ープ。世に抗うような個  
の顔つきはなく、楽しめれ  
ばいいと群れるままに気分

サクロの木に、とい廻の  
干涸びた実がぶら下がり、  
葉の落ちた枝越しにいつも  
と変わらない景色が広が  
る。だが、それとなく清澄な  
空気を感じるのは、どこか  
改まるからだろう。日本人  
に染み込んだ精神性。正月  
という日を境にして、過去と  
と未来のひとつ区切りと  
する。人々はこの日、ちよつ  
と身を引き締め、敬虔な氣  
持ちにするのでだろう。

う。部屋からあふれ、台所まで押し寄せ腹ごしらえしているものたちも。ピアノ、ギター、ヴァイオリン、ボンゴ、笛、鍋や皿まで打ち鳴らしじんちゃん騒ぎ。エロティシズムとは、などといえ、古くからの静かな住

も生き生きとした人間異さ  
を残していた時代であった。  
こんなことを書き連ねる  
と、よほど付き合いが多いそ  
うだが、普段はごく稀まれにし  
か人と接することはない。  
今もって不思議な、一月二  
日だけの現象であった。  
しかし、そんな無茶振り

が退いてしまったのだ。  
翌3日の片付け掃除まで、丸ごと忙殺される正月。マンネリの兆しを感じ始めたこともあり、それを機にやめた宣言を発した。以来アツンと途絶え、誰もこなくなつた。